

小説に描かれた山手を巡る

横浜に生まれ育ったり、移り住んだ作家は多く、山手を舞台に描かれた小説も多い。横浜山手アーカイブスでは、1月28日（水）10時からボランティアガイドの利根川あい子さんの案内で小説などに描かれた山手を巡った。参加者は11名。

まず、港の見える丘公園にある**神奈川近代文学館**からスタート。浦辺鎮太郎が設計したという建物は「ペン先」や「原稿用紙のマス目」などのデザインが隠れモチーフとなり、文学館らしさを漂わせている。浦辺は**大佛次郎記念館**も設計。『鞍馬天狗』で人気を集めた**大佛次郎**（1897-1973）は『霧笛』で開化期の横浜を情緒豊かに描いた。大佛は愛猫家としても知られ、猫がらみの企画展も多い。山手68番に住んでいた**O.M.プール**（1925-1970）は、関東大震災に遭遇した9月1日から2日にかけての克明な記録『古き横浜の壊滅』を残したが、当時この場所にあったイギリス海軍病院から崖下へ避難する様子を生々しく描いた。**三島由紀夫**（1925-1970）の『午後の曳航』は、ブテックを経営する未亡人と息子、未亡人を恋する航海士が織り成す人間模様と少年たちの残忍性を描いた小説であるが、占領中接收されていた谷戸坂上の家が舞台。ブテックのモデルは元町にある高級洋品店「THE POPPY」だそうだ。



カトリック山手教会前での説明

外国人墓地と作家たち

明治時代には西洋演劇の劇場で、日本人作家も通い詰めたと言われる**ゲーテ座跡**を過ぎ、**外国人墓地**へ。この墓地が登場する作品も多い。ワシントンのポトマック河畔に日米友好の桜を植えることに尽力したことで知られる**エリザ・R・シドモア**（1856-1928）は、明治17年の初来日以降、たびたび日本を訪れ、人力車で各地を巡り、『**日本・人力車旅情**』で日本の世相や日本人の姿を生き生きと描いた。シドモアは亡くなった後、外国人墓地に改葬されている。

『山月記』『季稜』などで知られる**中島敦**（1909-1942）は、喘息がこうじて若くして亡くなるが、横浜高等女学校の教員時代、パラオ島に渡るまで本郷町などに住み、漢文の素養に培われた作品を書き続けた。『**カメレオン日記**』では、偶然カメレオンを飼うことになった主人公がこの小動物の衰弱に自己を重ねつつ、悶々とした状況から抜け出せない日々が描かれるが、墓地がお気に入りの散策コースであった中島はシドモアの墓碑の手前に腰を下ろす主人公を描いている。

また女性で初めて芥川賞を受賞した作家、**中里恒子**（1909-1987）は、戦後まもなくの横浜を舞台にした『**墓地の春**』（原題『まりあんぬ物語』）を書いている。マリアンヌは、中里の姪にあたるミドリがモデル。混血児である悩みを抱えつつ成長するが、20歳で亡くなり、外国人墓地へ葬られる。彼女の墓参りをする叔母の目で戦前の外国人の扱いや外国人墓地の様子が描かれる興味深い作品である。

ラフカディオ・ハーンの見た明治の横浜

次にフェリス女学院歴史資料館へ。プロテスタントの宣教師メアリー・E・キダーによって1870年に創立された学校は「風車の学校」として親しまれてきた。母校フェリス和英女学校で教師をしていた**若松賤子**（1864-1896）はバーネットの『**小公子**』の翻訳者として知られる。夫と共に新宿中村屋を起こし、文学サロンを開いた**相馬黒光**（1876-1955）も一時期フェリスで学んだ。山手本通りを進み、カトリック山手教会へ。横浜生まれの児童文学作家**平塚武二**（1904-1971）は数多くの童話を残したが、『**ヨコハマのサギ山**』には、鷺山の異人屋敷に住む外国人の暮らしとその山の麓の小さな家に住む日本人の子どもたちの様子が描かれ、教会はトンガリヤソとして登場する。**ラフカディオ・ハーン**（**小泉八雲**）は、1890（明治23）年横浜港に到着するとすぐに人力車を雇い「テラヘユケ！」と命じ、居留地を抜けて最初に着いたのが、元町にあった増徳院。次に訪れたのは、百段はある石段を登った所（現在、高田坂上の元町百段公園）にあった浅間神社。美しい桜の木とここからの眺めに魅了されたと『**知られぬ日本の面影**』（原題『**日本瞥見記**』）の冒頭の章で綴っている。ハーンは4ヶ月間横浜に滞在したのち、英語教師の職を得て、憧れの「出雲」のくに島根県松江へと向かう。小説などの一節を紹介しながら利根川さんの案内で山手各所を巡った2時間半のツアー、山手の文化的な奥深さを改めて知ることができる楽しいひと時であった。（N）